

「ふくまる」高品質多収栽培マニュアル

茨城県農業総合センター・茨城県産米銘柄化協議会

「ふくまる」は、大粒かつ良好な外観品質と食味を兼ね備えた早生の業務用向け新品種です。栽培のポイントをおさえて、多収で品質の良い「ふくまる」の生産をお願いします。

生産目標

- ★実収量600kg/10a以上
- ★千粒重 23.5g以上
- ★検査等級 1等



「ふくまる」高品質多収栽培のポイント

1. 初期生育を旺盛に登熟期の肥効も保つ! → 施肥量は「コシヒカリ」を基準に増肥
総窒素量で、3割増または+3～4kg
2. 茎数をしっかり確保 → 坪60株植えとし、疎植を避ける
3. 適切な水管理で生育制御と登熟向上 → 適期の中干し、その後は間断かんがい
収穫前の落水は出穂後30日以降
4. カメムシ防除を徹底 → 早生品種のためカメムシの被害に注意

「ふくまる」の栽培管理について

項 目	留 意 事 項
圃 場 の 選 定	地力が中庸で、暗渠が設置され、中干しや間断灌漑などの水管理が容易で、出穂後30日まで用水が確保できる圃場を選定します。
種 子 の 準 備	浸種は、水温10～15℃で、 積算温度120℃(コシヒカリ並み) を目標とします。5月上旬移植の場合、浸種開始時期は3月末頃になります。
播 種 ・ 育 苗	播種量は催芽粉で 1箱あたり210g程度 (乾粉で160g程度)とします。温度及び水管理、病害防除は他の品種と同様です。5月上旬移植の場合、播種期は4月10日頃とします。
田 植 え	初期の分けつを促進して茎数を確保するため、移植時期は4月下旬～5月中旬が適します。 株間は18cm程度(60株/坪) が望ましく、十分な穂数を確保するため、疎植は避けて下さい。植付本数は4～5本/株とします。 他の奨励品種同様、縞葉枯病の抵抗性を持たないため、縞葉枯病の発生が懸念される地域では、苗箱施用の殺虫剤で媒介虫となるヒメトビウンカの防除に努めて下さい。

施 肥	基肥体系	既存の早生用全量基肥肥料を用います。緩効性肥料は70日タイプが適します。施肥量は、「コシヒカリ」を全量基肥肥料で栽培する時と比べて、窒素分で 3～3.5kg増肥 して下さい。	
	基肥＋穂肥	窒素施用量の決め方	窒素施用量は「コシヒカリ」栽培時の施用量を目安に決めます。 ①反収8俵～8俵半程度の「コシヒカリ」栽培を目安にする場合 基肥＋穂肥の合計窒素量で、3～4kg増肥します。 増肥分は基肥と穂肥に半分ずつ配分します。ただし、穂肥は最大3kgまでとし、超過分は基肥に回します。 (例:コシ基肥N3kg＋穂肥N1.5kg→ふくまる基肥N4.5kg＋穂肥N3kg) ②反収9俵程度の「コシヒカリ」栽培を目安にする場合 基肥、穂肥ともに窒素量を3割程度増やします。 (例:コシ基肥N6kg＋穂肥N2kg→ふくまる基肥N7.8kg＋穂肥N2.6kg)
	体系	穂肥時期	穂肥は出穂前18日 (幼穂長5～10mm)を目安に施用します。 なお、安定多収生産の目安は、移植後60日の生育で、 m当たり茎数580本以上、草丈67cm、葉色3.6～4程度 となります。 この時期に葉色4.5、SPAD値38を超える場合は、倒伏の恐れがあるため、追肥を控えて下さい。
水 管 理		移植後35日を目安に、茎数が約22～23本/株(約400～430本/m ²)になったことを確認のうえ、中干しを行います。中干しは田面に軽くひびが入る程度までとし、中干し終了後は出穂後30日まで間断かんがい(田面が乾く前に入水、自然落水を繰り返す)をします。入水間隔は3～4日程度が目安です。	
病 害 虫 防 除		葉いもち病、穂いもち病には、強くはありませんので、葉いもちの病斑を発見したら速やかに防除します。紋枯病にも注意し、適切な薬剤防除をします。 早生品種のため、鳥害に注意し、カメムシの防除は必ず穂揃期頃(発生が多い場合には乳熟期にも追加防除) に行います。 7月20～25日には出穂 しますので、圃場周辺の畦畔除草も7月上旬までに行います。	
収 穫 期		収穫適期は、帯緑率6～15%の時点です。 出穂期後の積算平均気温で960～1,040℃、出穂期後の日数で37～40日頃が目安となりますが、天候や収量により収穫時期は前後します。必ず籾の黄化程度を確認してから収穫を行って下さい。	
乾 燥 調 製		玄米の仕上がり水分は15%とします。「ふくまる」は千粒重が「コシヒカリ」より2～3g重く粒厚が厚いので、籾摺りの際に肌ずれが起きないようにロール幅を調節してください。	

※施肥量については、地力や生育に応じて調節する必要があります。